

令和4年度メルマガみやぎ 日本遺産特集 バックナンバー

令和4年度

※特集タイトルをクリックすると、読みたい記事にジャンプします。

No.	配信日	特集タイトル
1	令和4年 5月20日(金)	日本遺産とは、政宗が育んだ“伊達”な文化とは
2	令和4年 7月29日(金)	仙台藩による多賀城跡の調査と保護
3	令和4年 9月30日(金)	まだ見ぬ世界へ思いを馳せて—坤輿万国全図の紹介
4	令和4年11月25日(金)	伊達政宗公ゆかりの建造物 陸奥国分寺薬師堂
5	令和5年 2月24日(金)	名勝おくのほそ道の風景地の紹介—陸奥国分寺鐘楼の修理成果から—
6	令和5年 3月31日(金)	日本三景松島—今年は名勝指定から100年—

■ 1 日本遺産とは、政宗が育んだ“伊達”な文化とは ■

日本遺産とは、文化財や伝統文化を通じて地域の活性化を図るために文化庁が認定しているもので、その特徴は、文化財や地域で受け継がれている伝承、文化をストーリーでパッケージ化し活用を図るところにあります。

文化庁は、これまでに日本を代表する地域固有のストーリーとして 104 件を認定しており、「政宗が育んだ“伊達”な文化」はその1つとなっています。

さて、その「政宗が育んだ“伊達”な文化」のストーリーは、伊達政宗と仙台藩の文化をテーマに 51 の文化財で構成されています。仙台藩を築いた伊達政宗については、戦国大名として政治・軍事面での活躍は広く知られているところですが、その一方で時代を代表する文化人でもありました。上方に負けない気概で自らの“都”仙台を創りあげようと、政宗は古代以来東北の地に根づいてきた文化の再興・再生を目指したとされています。

そして、それは政宗だけに留まらず、時代を重ねるにつれ、後の藩主に、さらには仙台から全国へ、武士から庶民にまで、さまざまな方面へ広がり、定着し、熟成を加えていきました。

日本遺産に認定された地域は仙台市・塩竈市・多賀城市・松島町で、この地域にある 51 の構成文化財から、今でも伊達政宗と仙台藩の文化を体験することができます。認定地域では、この日本遺産を活かした地域の活性化を図っていきます。

■ 2 仙台藩による多賀城跡の調査と保護 ■

仙台藩では、初代藩主伊達政宗公以来、郷土の歴史文化を尊重し、歌枕やの比定地調査を始めとして、古典の研究、や名所旧跡の調査が行われたことが分かっています。こうした調査により、多賀城跡が発見され、保護されてきました。

多賀城跡は 724 年に創建された奈良・平安時代の陸奥国府跡で、11 世紀の中頃まで古代東北の政治・軍事・文化の拠点でした。

その後は長らく忘れ去られていましたが、江戸時代に多賀城碑が発見され、古代にまでさかのぼる遺跡であることが分かると、藩の儒学者佐久間洞巖（さくまどうがん）や地元の人々によって調査研究が行われ、保護されるようになりてきました。何度か建て替えられてはいるものの、多賀城碑を保護するための建物であるの覆屋（おおいや）はも江戸時代にはつくられていたとみられ、これは史跡保護の先駆けといえるかもしれません。

この多賀城跡、学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるものとして昭和 41 年（1966 年）に、国の特別史跡に指定されました。、再来年の 2024 年に

は創建 1300 年を迎えます。現在、継続的な発掘調査とともに、2024 年に迎える創建 1300 年にむけて外郭南門や大路、当時の役人が事務をしていたと考えられる建物跡などの復元が進められています。

江戸時代から続くこうした調査研究や保護は今も取り組まれており、地域の文化を育む土壌となっています。

■ 3 まだ見ぬ世界へ思いを馳せて—坤輿万国全図の紹介— ■

皆さんは、宮城県図書館のなかに展示室があるのをご存じでしょうか。ここでは、常設展「本と人の文化史」のほか定期的に企画展示も行っています。

展示室の中央にあってひときわ目立つのが、日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の構成文化財のひとつである、重要文化財坤輿万国全図（展示は複製、原品は保存のため収蔵庫で保管）です。17 世紀初めに、イエズス会宣教師マテオ・リッチ（1552～1610）が、中国明朝で製作した木版刷りの世界地図です。中国に渡ったリッチは、アジアの人々に世界の広さを伝えるため、世界地図の漢訳に努めました。「坤輿」とは古代中国の書物『易経』の言葉で、「坤」は大地、「輿」は乗物を意味し大地が大きな乗物に例えられています。世界的にも現存例が少ない、貴重な文化財です。

坤輿万国全図は、もともと仙台藩の藩校・養賢堂に伝わっていました。仙台藩では養賢堂を中心に海外の学問や文化の探求が盛んでしたので、おそらく藩主や藩士たちはこの世界地図を見ながら、まだ見ぬ世界へ思いを馳せていたことでしょう。

コロナ禍で海外旅行が難しい今、坤輿万国全図を前に当時の人々が考えた「世界」を見つめてみませんか。私たちが知っている世界との違いをたくさん発見できます。

なお、時折貸出で展示されていないこともありますので、見に行かれる際は図書館に確認した上でお出かけください。

■ 4 伊達政宗公ゆかりの建造物 陸奥国分寺薬師堂 ■

仙台藩初代藩主伊達政宗公が造営した建物としては、仙台市青葉区にある大崎八幡宮（国宝）や松島町の瑞巖寺（国宝）が有名ですが、仙台市内にはもう一つ、伊達政宗公ゆかりの建造物が残っています。

それは、仙台市若林区に所在する陸奥国分寺薬師堂。「陸奥国分寺」との名前のおり、奈良時代に聖武天皇の詔（みことのり）によって全国に建てられた国分寺の一つがあった場所に、伊達政宗公が再建したものです。再建にあつ

ては、泉州（大阪府）の工匠駿河守宗次等を招いており、「造立慶長十二年丁未十月廿四日」の棟札から慶長12年（1607）に竣工したことが分かっています。

屋根は入母屋造の本瓦葺で、簡潔ながら力強い構成美がみられます。内部の厨子は入母屋造（いりもやづくり）、柿葺（こけらぶき）で、壁や扉は彫刻、金箔、飾金具で極彩色に装飾され、豪華絢爛な“伊達”な文化の特徴がうかがえます。大崎八幡宮とともに、仙台市内にある安土桃山時代の代表的な建造物で、明治36年に重要文化財指定、平成28年に日本遺産構成文化財に認定されました。境内は紅葉が美しく、現在は市民の憩いの場としても親しまれています。

■ 5 名勝おくのほそ道の風景地の紹介－陸奥国分寺鐘樓の修理成果から■

新たな年を迎え一か月が過ぎましたが、読者の皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。令和5年最初の日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の連載は、構成文化財である国の名勝「おくのほそ道の風景地」をご紹介します。

名勝「おくのほそ道の風景地」とは、江戸時代の俳人松尾芭蕉とその弟子の曾良が、陸奥・北陸路を旅し、紀行文『おくのほそ道』に記した名所旧跡で、往時を示すよすがとなる景観を今に伝えています。当日本遺産の構成文化財になっている「おくのほそ道の風景地」は6か所ありますが、そのなかでも最近整備事業が行われた「木の下及び薬師堂」（仙台市若林区木ノ下）を取り上げます。

元禄2年（1689）5月に芭蕉たちが訪れた木の下及び薬師堂は、古代以来の名刹である陸奥国分寺の境内にあたり、江戸時代には南大門跡に仁王門（宮城県指定有形文化財）、講堂跡に薬師堂（重要文化財）、廻廊跡の一部に鐘樓（仙台市登録有形文化財）がありました。そのうち薬師堂は慶長12年（1607）の造営であり、仁王門はそれと同時期に建立されたと見られていますが、鐘樓の建築年代も同時期と推定されながらも詳細は不明でした。

しかし、平成31年度（令和元年度）から令和3年度にかけて実施された鐘樓の解体修理工事で、鐘樓の建築年代の手がかりを知ることができました。この工事では、礎石を除いた全てを解体し、可能な限りで既存材を使って組み立てています。

解体した部材を調査した結果、鐘樓を支える通し柱の部材は1527年のものと分かり、かつ木材の曲がりを活かした状態で組み立てられていたことから、この部材は鐘樓のために加工されたと考えられます。よって鐘樓は16世紀前半つまり江戸時代以前にすでに創建されており、それがのちに仙台藩によって再整備されたのではないかと推測されるようになりました。この推測に基づくと、仙台市内では最古の鐘樓建築になります。

まだまだ寒い時期が続きますが、春には鐘楼の近くで桜が咲き誇ります。ぜひお花見がてら訪れていただき、古来の名所旧跡にして、芭蕉から現代につながる「おくのほそ道の風景地」をお楽しみいただけましたら幸いです。

■ 6 日本三景松島—今年は名勝指定から100年— ■

日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」構成文化財のひとつである松島は、大正12年(1923)の名勝指定から今年で100年になります。

日本三景として全国屈指の知名度をもつ松島は、平安時代から松島を歌枕にした和歌が多くつくられ、さらに鎌倉・室町時代になると、多島海の美しい風景が浄土の入口とも見立てられることで、さらに認知が広がります。

江戸時代には、こうした歴史ある松島の風景を仙台藩も保護し、藩主が御仮屋御殿を建てて観賞したり、文人墨客が訪れる観光地になっていきました。その一人に松尾芭蕉がおり、後年記した「おくのほそ道」によって、憧れの観光地としての地位を築きます。

その後、明治維新により一度荒廃しますが、宮城県が大正時代に松島公園として保護・整備したことで徐々に回復、そうした取り組みによって、大正12年に国の名勝に指定されました。

昭和27年には名勝のなかでも特に価値の高い特別名勝となり、名勝指定から100年、日本を代表する松島の風景は、戦争や東に本大震災など大きな試練にさらされつつも、今日まで守られてきました。

これからの100年も、美しい風景を守り、地域のために活用していければと思います。